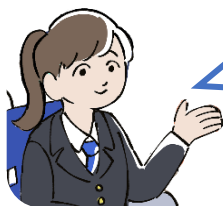


A. 子どもとのつながり

- ①話しかけてきたときに、目線をあわせることで、子どもは話を聞いてもらえた実感します。話の途中で指導をしてしまうと本音まで聞き出せません。話を切り上げず最後まで聞くことで、子どもの感情を共感的に受け止めやすくなります。また、どうしても緊急で対応をしなければならず、子どもが話しかけてきたタイミングで傾聴が難しい場合は、改めて時間を取って話を聴く約束をしたり、再度こちらから声かけをしたりしましょう。何か聴いてほしかったことがあるかもしれません。
- ②授業のめあてや見通しをもつことで、はじめからおわりまでの授業や活動の流れがわかり、安心感が生まれます。ここを頑張ったら、次の活動は自分の好きな活動だというように、自分の頑張るところを見つけやすくなります。
- ③起きたトラブルの事象だけを見ず、そのトラブルに至った経緯を確認しましょう。決めつけるような言動は控えて、双方から話を聞いたり、その場にいた第三者の捉え方を聞いたり、中立的な立場で言い分を聞く姿勢が大切です。
- ④反論や指導をしようとして感情的になるのではなく、子どもの言動をわかろうとすることが大切です。なぜ指導した通りにしないのかを聞き、場合によっては、段階的で具体的な行動の指示が必要です。その際は、「～しよう」との声掛けも効果的です。
- ⑤最終的な判断を多数決で行うことが事前に合意されている状況であったとしても、その結論に至るまでに様々な意見を検討することが必要です。意見交流をする際の約束事を事前に決めたり、少数の意見を取り入れたりしながら、合意形成を行うことを大切にしましょう。同時に、発言がしやすい心理的安全性を高めるためにも、日頃から相手を攻撃しない主張のやり方や、聴く力を育てていくことも大切です。



A・B・Cそれぞれの項目で挙げた視点例は、他の項目にも当てはまるところがあります。ここで挙げた視点例以外にも、みなさんの校園所で尊重されている視点も大切です。

B. 子ども間・教職員間のつながり

- ①相手に教える場面で自分の知識を整理し、相手にわかりやすく説明する力を身につけていきます。教え合う関係づくりと併せて、価値観を共有できるような気づきを交流する場面も、他者の考え方を知る機会となります。繰り返し交流することで、相互理解が深まり本音も出やすくなります。聞いてもらえる喜びを感じる場面も増え、自尊感情の育成につながります。
- ②子どもたちは、学習内容を深めるようなつぶやきや、他者の人権を守るようなつぶやきをすることがあります。そのつぶやきを拾い上げ、価値づけて全体に返すことで、つぶやきを発した子どもの気づきを価値あるものとして、他の子どもたちが受け入れやすくなります。子どもたちで話し合えて認め合える集団づくりが進みます。併せて、自由につぶやくことができる(間違っても笑われない、馬鹿にされない)集団であることも価値づけて全体に返すことで、より人権が守られた集団づくりが進みます。
- ③教職員間の会話では、子どもの成長を願うあまり、つい子どもの改善点について話しがちです。まずは、子どもの良い面を話題にして、他の教職員との交流を図ってみましょう。行事やクラブ活動など、子どもたちが授業とは違う表情を見せることがあります。教科等の学習とは別の目標、教室とは異なる人間関係が、子どもの意外な一面を引き出すことがあります。その場面をつぶさに捉え、職員室での会話に活かすと、その子どもの良い面が立体的にとらえられるようになり、様々な教育活動での出番づくりに役立ちます。
- ④教職員が悩みや困りごとを抱えこんでしまい、事態の早期解決が望めないケースがあります。普段から、伝え合うことで、早期に対応ができる気づきが生まれます。また、相談できる関係性が作られることで、お互いの良い点だけではなく、課題についても指摘し合えるようになります。反対に、一貫性を欠く指導は子どもたちの不利益となる可能性があるため、お互いに指摘し合える関係づくりが、チームとして必要なことです。職場のウェルビーイングにつながります。
- ⑤校園所は、様々な人間関係があります。うまく関われない子どもとの関係性に悩んでいる時は、他の教職員がその子どもとどのように接しているのかを見る機会を得ると、子どもとの関係づくりの参考となります。普段から様々な教育活動を見ることができ開かれた環境も、他の教職員の参考となります。

C. 居心地のよい環境づくり

- ①相手を傷つける発言や行動について、教職員は容認しないという毅然とした姿勢を示すことは子どもたちの安心感につながります。特に、教材や教具、机への落書きを放置すると、より過激な内容となったり、差別的な内容となったりと、子どもがさらに傷つく状況が起こります。一方で、発言や落書き等に込められたSOSを見逃さず、しんどいことは相談してほしいというメッセージも子どもたちに伝えてみましょう。
- ②子どもの作品は、その子の校園所での活動の成果であり、大切なものです。教職員にとっては多くの成果物の一つであっても、子どもから見ると、たった一つの作品です。その成果物を教職員が丁寧に扱うことで、子ども自身が「自分は大切にされているんだ」と思えるようになります。また、自分の作品だけではなく、他の人の作品も丁寧に扱われているところを見ることで、「誰もが大切に扱われている」と思えるようになります。
また、成果物は、「大切なものをありがとう」のように感謝の言葉を添えるなどして、いつまでも展示せずに期間を決めて返却しましょう。
- ③長期欠席をしている子どもの机や、交流学級で使用されている机にプリントが積み重ねられたり、椅子がどこかに放置されていたりするなど、ぞんざいに扱われていると、それを見ている周りの子どもたちもぞんざいに扱うようになります。また、自分が普段使っている机や椅子を勝手に他人が使っていると、なんとなく嫌だと思う子もいます。
成果物の取り扱いと同じく、その机や椅子を教職員が丁寧に扱うことで、「誰もが大切にされているんだ」と思えるようになり、また、子どもたちにも協力を広げていくことで、居心地のよい環境づくりにつながっていきます。校園所に居心地のよい教室等があることで、自然と子どもたちの意識が向くようになります。
- ④⑤子どもとの信頼関係が構築されると、「あの先生なら安心して話を聞いてもらえる」と困り事を相談してきます。その信頼を傷つけないように、情報を共有する範囲は本人の了承を得た範囲までとします(命に関わる情報は別)。いくら教職員間であっても不用意に情報を共有することは信頼関係を崩しかねません。教職員間での情報共有は、適切な場所で行い、教育活動に活かす範囲内となるよう心がけましょう。